

〔寶治二年記〕十月廿一日甲午、今日太上皇○後嵯峨初御幸宇治平等院○中略御舟寄釣殿攝政○直衣原實經○藤兼被候入御本堂、北庇東面簾中、攝政候御簾、東岸墻根曝麻布、河上浮柴船、皆存例、但離宮諸輩、并旅人等被略之云々、

〔散木弄詞集九雜〕思ふ事侍りけるころよめる

風をいたみゆらの戸渡る柴船のまばしのがれて世をすごさばや

〔和漢船用集四舟名數海鮑〕檜物舟。源平盛衰記に、長門のひもの舟といへり、檜細工、或は檜材木を積舟也、

〔源平盛衰記三十三〕平氏著屋島事

長門ハ新中納言ノ國目代ハ紀民部大輔光季ナリケリ、當國ノ檜物舟トテ、マサノ木積タル船百三十餘艘、點定シテ奉ル、此ニ乗移リテ、四國ノ地へ著給フ、

〔和漢船用集四舟名數海鮑〕鹽舟。赤穂灘等の鹽荷を積舟なり

〔新撰六帖三〕ふね

あはち島かさまにわたるまほ舟のからろの音ぞ沖に聞ゆる

〔利根川圖志〕運輸

銚子浦より鮮魚を積み上するをなま船といふ、舟子三人にて、日暮に彼處を出て、夜間に二十里餘の水路を浜り、未明に、布佐、布川に至る、特この處を多しとす、

〔和漢船用集六河海江湖獵船〕鳥貝船。又鳥蛤と書、攝州尼崎の沖に多くある貝なり、是をひさぐの舟を云上棚ほそくして、棚小の舟とよめる類なり、此貝、尼崎の外他邦に有ことをきかず、此貝を取舟は又別也、獵船の中船にして、舳に大立横上あり、此舟をよこさまになして、順風に帆をかけ、網を引なり、本帆、彌帆、送帆あり、本邦三桅の者、此舟のみ、